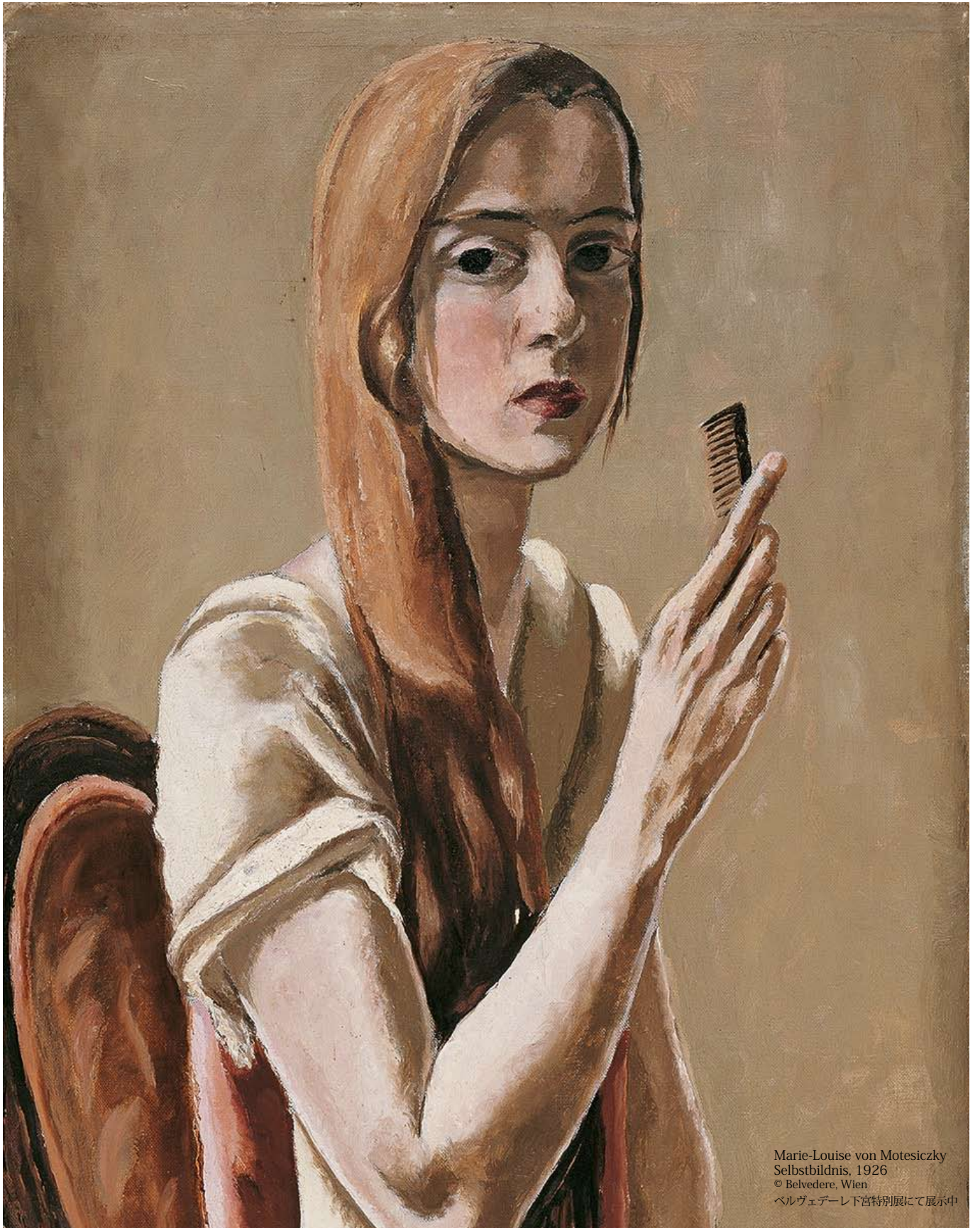


月刊ウィーン

Monatsmagazin Japanisch
現地オリジナル取材と編集で
ウィーンを伝える月刊情報紙
創刊平成元年 創刊30年目 **Nr. 346**
GEKKAN-WIEN 2018年6月号



Marie-Louise von Motesiczky
Selbstbildnis, 1926
© Belvedere, Wien
ベルヴェデーレ下宮特別展にて展示中



杉本純の原子力の話II ウィーンと京都 79

総合資源エネルギー調査会の基本政策分科会は五月六日、新たなエネルギー基本計画の素案を示した。二〇二四年策定の現行計画を踏まえた二〇三〇年のエネルギーミックス(電源構成で、再エネ二二・二四%、原子力二一・二〇%、LNG二七%、石炭二六%、石油三%)の実現に加え、地球温暖化問題や化石資源枯渇など、超長期的な視点から、二〇五〇年を見据えたシナリオ設計を合わせた構成となっている。

素案では、二〇三〇年エネルギーミックスについて、「既存のインフラ・技術・人材を総合的に勘案し、相応の蓋然性を持って示された見直し」と、その重要性を再認識する方、現状では「道半ばの状況」とみて、エネルギー源ごとの施策の深掘り・対応強化により、「確実な実施を目指す」としている。原子力については、「長期的なエネルギー需給構造の安定性に寄与する重要なベースロード電源」と位置付けられ、二〇三〇年エネルギーミックスにおける電源構成比率の実現を目指し必要な対応を着実に進めるものと明記された。また、二〇三〇年に向けた政策対応として、「原子力政策の再構築」とする項目で、福島「復興・再生、バックエンド問題の解決に向けた取組などについて詳しく述べている。



総合資源エネルギー調査会 基本政策分科会(第27回)

http://www.enecho.meti.go.jp/committee/council/basic_policy_subcommittee/027/

さらに、二〇五〇年に向けては、技術革新の可能性と不確実性、情勢変化の不透明性が伴い、確実性の高い予測が困難との考えから、「あらゆる選択肢を追求する」エネルギー転換・脱炭素化を目指した主力位での野心的な複線シナリオ」を採り入れることとしている。委員からは、早急な仕組み作り、国際社会との連携の必要性など、多くの意見があった。今回合意で示されたエネルギー基本計画素案は、委員からの意見を踏まえて修正案の後、パブリックコメントに付され、今夏にも閣議決定される見通しである。

さて、今月のウィーンと京都の対比では、両市のバドミントン事情について述べてみたい。オーストリアはバドミントンが盛んであり、ウィーンにもバドミントン専用コートを持つスポーツセンターが数多くある。これらのスポーツセンターでは平日でも夕方以降は多くの人々が気軽にバドミントンを楽しんでいる。この他、ウィーンには、公的機関が管理する多目的の体育館が多くあり、熱心なバドミントンファンは、このような体育館を使用するクラブチームに所属し、安価にバドミントンを楽しんでいる。また、公式試合もこのような多目的体育館で行われている。VHTバドミントンクラブという日本人主体のサークルもある。初心者を中心であるが、トップはレベルが高い。

一方京都でも、中高大でのクラブチームを始め、初級、中級、上級、選手まで市民向けの多くのバドミントンチームがあり、体育館などで楽しんでいる。例えば、西京極のハンナリーズアリーナは、バドミントンコートが十二面もあり、京都市が設置する体育館の中では、国際競技ができる要件を備えた唯一の施設であるが、個人での利用もできる。併設する京都市市民スポーツ会館は、地域体育館として市民に広く利用されている。京都外大西高等学校は、全国大会出場ばかりか、平成二六、二七年とベスト十六以上の成績を収めている。京都外国語大学出身の田中雅彦は、渡欧しオーストリア代表として国際大会に参加した、日本人初のプロバドミントン選手として活躍した。両市では、老若男女がバドミントンを楽しんでいるのが共通している。



余談であるが、著者はウィーン滞在中、VHTバドミントンクラブに所属して土曜日の夕方は練習と試合をよくした。京都では京大大学院学生時にバドミントンコートが専攻にあつたのでよく練習や試合をした。その後就職した研究所でもバドミントンクラブに数年間所属した。ウィーンでは中レベルの選手だったが、大学時代はほとんど無敵だった。両市のバドミントン事情を紹介できた幸運に感謝しつつ、VHTバドミントンクラブの写真を掲載させていただく。

■ 杉本純 前京都大学教授
元原子力機構ウィーン事務所長 ■